

## 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの参加者の特徴とアウトカム変数の妥当性

目白大学心理学部 宇野 耕司

### 【要 約】

本研究は、「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの参加者の特徴とアウトカム変数の妥当性を評価することを目的とした。

プログラムの実施前後にアンケート調査を行った（31クール，n=175）。

その結果，参加者の特徴は，年齢の幅は広く，配偶者と子どもからなる核家族で地域に暮らし始めて間もない人たちであり，子どもに対する不安は低く，子どもへの肯定的な気持ちを抱き，夫婦関係満足度は高い人たちであった。ただし，参加者の中には，育児不安が高く虐待不安を抱く人や，子どもへの肯定的な気持ちを抱けない人や夫婦関係に不満を抱く人が含まれていた。これらのことから本プログラムはポピュレーション・アプローチ（1次的予防）で対象となる参加者が参加していると考えられる。次に，本プログラムのアウトカム変数に妥当性があることが一部で確認された。しかし，「育児不安の低減」と「パートナーとの関係を結び直す」の妥当性についてプログラムの利害関係者と検討し，記述内容のコンセンサスを得ていく必要性が示唆された。

今後は，アウトカム変数を適切に測定できる尺度を開発し，アウトカム変数の妥当性を高める研究が必要である。

キーワード：乳児，育児不安，虐待不安，ポピュレーション・アプローチ，プログラム評価

### 問題

#### 1. ポピュレーション・アプローチによる子育て支援と虐待の未然防止

児童虐待の発生要因は複雑である。基本的には個人，家族，地域，社会といった生態学的な視点で考えることが重要である（Butchart, Harvey, Mian, Fürniss, & Kahane, 2006 小林監修2011；庄司，2008）。地域レベルで児童虐待に取り組む方法としてポピュレーション・アプローチ（ストラテジー）<sup>1)</sup>による子育て支援がある。例えば，母子保健あるいは子育て支援におけるポピュレーション・アプローチは，乳幼児健康診査や乳幼児全戸訪問事業といったすべての乳幼児とその家族を対象とした支援のことである。国の施策である「健やかな親子21」のあり方として北澤（2018）は，「健やか親子」に

関する普及啓発の対象を虐待予備軍とするハイリスク・アプローチだけでは不十分であり，同時にポピュレーション・アプローチに取り組むことが重要と述べている。しかし，児童虐待における支援の現状は主にハイリスク・アプローチであり，リスクの高い人たちの児童虐待を未然に防止するという観点から行われていることが多く，リスクの高い人の早期発見・早期介入システムの構築が進められている。一方で，リスクが高いかどうかもわからない一般の親を対象としたポピュレーション・アプローチによる取り組みはあまり報告されていない。しかし，ポピュレーション・アプローチによる子育て支援を行うことが今後の虐待の未然防止の重点課題と考えられる。

## 2. 育児不安の解決

子どもへの不適切な養育や虐待が禁止される社会において、できるだけ早い段階で育児不安が解決できることが重要である。確かに、育児不安と児童虐待との関連性や相互の影響についての結論はまだ出ていない。しかし、育児不安を解決していくことによって、体罰等の不適切な養育を未然に防止できる可能性が示唆されている(原田, 2006)。また、育児不安そのものが虐待の発生要因というよりは、育児不安が解決されないまま放置されることで体罰等の不適切な養育にいたるのではないかと考えられている(原田, 2006)。つまり、多くの親が抱く育児不安の早期解消に着目した支援が重要である。子育てにおいて誰にでも生じ得るのが育児不安である。山崎他(2018)によると、3~4か月の乳幼児健康診査を受診した母親(20,729名)で、「育児に自信が持てない」に「はい」と回答した者は4,195名(20.2%)、「いいえ」と回答した者は6,486(31.3%)、「何ともいえない」と回答した者は9,604名(46.3%)であった(無効回答除く)。山崎他は、「はい・どちらともいえない」を選択した母親を育児に自信が持てない母親として再カテゴリー化した<sup>2)</sup>。山崎他によると育児に自信が持てない0歳児(3~4か月児)を持つ母親は、66.5%となる。

「虐待しているのではないか」という育児不安(本論では、以下、虐待不安と呼ぶ)もある(渡邊, 2011)。山崎他(2018)によると、3~4か月の乳幼児健康診査を受診した母親(20,729名)で、「虐待しているのではないかと思う」に「はい」と回答した者は4880名(4.2%)で、「いいえ」と回答した者は17,714(85.5%)で、「何ともいえない」と回答した者は1,610名(7.8%)であった(無効回答除く)。育児不安同様に「何ともいえない」を含めると、虐待不安は12%であった<sup>3)</sup>。大原(2002)によると、子どもの虐待防止センターへの電話相談は育児不安相談と虐待相談(相談全体の2割弱程度)に分類され、育児不安相談のうち77%が「自分が虐待してしまうのではないか」や「自分がやっていることは虐待なのではないか」という虐待危惧についての相談であると述べている。そして、この虐待危惧を抱く相談者の中に虐待予

備軍を含んでいると述べている。渡邊(2011)は大原(2002)のこの説明を引用し、育児不安は虐待へ至る初期の背景要因として広くあるのではないかと述べている。

山崎他(2018)は、「育児に自信が持てない」を従属変数とした多重ロジスティック回帰分析を行った。その結果、3~4か月児を持つ母親の場合、第1子を参照カテゴリーとすると、オッズ比は第2子( $OR=0.70$ )、第3子( $OR=0.46$ )と共に1よりも低かった。虐待不安を従属変数とした分析結果は、第1子を参照カテゴリーとすると、オッズ比は第2子( $OR=4.32$ )、第3子( $OR=5.64$ )と共に1よりも高かった。つまり、第2子以降の0歳児を持つ母親への支援は、虐待不安に対応した支援が提供される必要があると考えられる。しかし、第1子の0歳児を持つ母親への支援は、第2子や第3子を得た後の虐待不安が高まってからではなく、第1子を初めて得て「育児に自信が持てない」という困難がある時から全数的に支援が提供される必要があると考えられる。とりわけ、母親自身では解決が困難な育児不安(虐待不安含む)を低減する支援が求められるのである。

これらの観点から、虐待の未然防止をめざすポピュレーション・アプローチにおいて育児不安に着目した支援を充実していく必要があると考えられる。

## 3. 乳児を持つ母親を対象とした子育て支援プログラム

育児や子育ての問題を抱える母親を対象とした支援として、母子関係の悪化に対する予防的アプローチとしてのグループ・カウンセリング(三上, 1995)、虐待問題を抱える母親が対象となるグループアプローチ(広岡, 2003)、育児不安のある母親が対象となるノーバディズ・パーフェクト・プログラム(原田, 2007)などが報告されている。しかし、0歳児を初めて持つ母親を対象とした子育て支援プログラムの実践報告はほとんどない。また、実践報告の多くは、ハイリスク・アプローチの観点に基づくものと考えられる。今後、乳児期に実施される効果的な子育て支援プログラムについて議論を深めるためには、ポピュレーション・アプローチの観

点を有する実践の報告が求められる。

そこで、本研究では、ポピュレーション・アプローチの観点を有する子育て支援プログラムの開発評価研究の一環として、0歳児を初めて持つ母親を対象とした子育て支援プログラムの1つである「新米ママと赤ちゃんの会」(以下、本プログラムとする)を取り上げる。本プログラムは区市町村で実施され、0歳児を初めて持つ母親の育児不安の低減や子育ての仲間づくりを促進しようとするものである。本プログラムは、公認心理師や保健師等の専門家が虐待等のリスクの高い人を早期発見して参加させるものではない。本プログラムは、子育てに不安があり、「同じくらいの月齢の子を持ち近くにに住む母親と出会い・交流したい」というニーズがある人たち(宇野, 2019)が、自ら参加するプログラムと考えられる。これまで、プログラムに関連する文書とファシリテーターからの聞き取り(宇野, 2015, 2016)や、参加者から収集した自由記述(宇野, 2019)の内容を基にプログラムのアウトカム変数が何かについて検討されてきた。本プログラムは、余裕やゆとりの回復、育児方法の獲得、孤独感の軽減、育児不安の解消と自信の獲得、パートナーとの関係を結び直す、自主サークル化、母親が自分らしく健康に暮らす、子育てしやすい社会作りがアウトカム変数と考えられており、各変数の関連が図で示されている(宇野, 2019)。

ところで、吉田(2012)は、育児不安の関連要因を母親側の特徴、子ども側の特徴、家族関係・夫婦関係、社会的サポートの4つに整理している。「母親側の特徴」は、年齢、職業の有無・職業観、性役割分業意識、生活の充実感・趣味の有無、理想と現実の認識、自己注目傾向である。「子ども側の特徴」は子どもの気質・育てやすさ、子どもの数である。「家族関係」は、核家族・複合家族、夫婦関係・夫婦の会話、夫のサポートである。「社会的サポート」は、友人、社会的サポート、近所づきあい・家族以外の人との会話である。本プログラムで考えられているアウトカム変数は、吉田(2012)の整理する育児不安に関連する要因と重なる。例えば、本プログラムに参加することで、パートナーとの関係を結び直す(夫婦関係の肯定的な変

化)ことや夫婦の会話時間が増えることが考えられる。また、友人の数が増え、その友人からの社会的サポートが得られ、家族以外の人との会話が増えるといったことが考えられる。このように吉田(2012)の知見と本プログラムで考えられているアウトカム変数とが部分的に一致していると考えられる。しかし、予備的にアウトカムに関する仮説検証を行い、本プログラムのアウトカム変数の設定に関する有用な知見を得る必要がある。なぜなら、プログラムの概念化やデザインが不完全であれば望ましいアウトカムを生み出せない場合がある。これを「理論上の失敗」と呼ぶ(Rossi, Lipsey & Freeman., 2004 大島・平岡・森・元永監訳2005, p.76)。理論上の失敗を回避するには、予備的観察、例えば、利害関係者へのインタビューなどの質的データの分析が必要とされ、また、量的データの分析を行った例もあったとされている(Rossi et al., 2004 大島・平岡・森・元永監訳2005, pp.152-154)。本プログラムのアウトカムの設定について、ファシリテーターから得られた意見を分析し、アウトカムに関する因果関係の記述が行われている(例えば、宇野, 2015; 宇野, 2019)。今後、理論上の失敗を検討するために、プログラムが何を目指しているかといった因果関係に関する仮説の妥当性を、量的データの分析によって確認する必要があると考えられる。ところが、量的データの分析によってアウトカムに関する仮説検証は行われていない。アウトカム変数の設定が妥当であれば、アウトカムに関する仮説が統計的に支持されると考えられる。また、本プログラムはポピュレーション・アプローチとしての子育て支援と考えられている。具体的には、育児不安を児童虐待の小さなリスクと考え、そのリスクが集団全体に及んでいると仮定している。しかし、本プログラムが対象とする集団の特徴(参加者の平均年齢や育児不安の状態など)に関する基本的なデータが得られていない。プログラムの参加者の特徴を知ることによって、ポピュレーション・アプローチと呼べる集団が参加しているのかを検討できると考えられる。

## 目的と仮説

### 1. 研究目的

第1の目的は、「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの参加者がどのような特徴を持っているのかを検討し、本プログラムがポピュレーション・アプローチと呼べる集団を対象としているのかを明らかにすることである。特に、参加者の属性と、アウトカム変数の観点、すなわち「育児不安の解消と自信の獲得」、「虐待不安」、「子どもへの肯定的な気持ち」、「夫婦関係満足度」、「夫婦の会話時間」から明らかにすることである。

第2の目的は、予備的にアウトカムに関する仮説検証を行い、本プログラムのアウトカム変数の設定に関する有用な知見を得ることである。主要なアウトカム変数である「育児不安の解消と自信の獲得」、「パートナーとの関係を結び直す」、「自主サークル化」、「子育てしやすい社会作り」について検討する。アウトカム変数の設定が妥当であれば、以下の仮説が支持されると考えられる。

### 2. 仮説

#### 1) 仮説1「育児不安の解消と自信の獲得」

育児不安スクリーニング尺度得点は実施前よりも実施後の方が低い。育児不安因子得点は実施前よりも実施後の方が低く、自信のなさ因子得点は実施前よりも実施後の方が低い。

虐待不安得点は実施前よりも実施後の方が低い。

#### 2) 仮説2「パートナーとの関係を結び直す」

夫婦関係満足度得点は実施前よりも実施後の方が高い。夫婦間の会話時間得点は実施前よりも実施後の方が高い。

#### 3) 仮説3「子育てしやすい社会作り」

子育てコミュニティ感得点は実施前よりも実施後の方が高い。

#### 4) 仮説4「自主サークル化」

プログラム終了時点において自主サークルが作られる。

## 方法

### 1. 研究デザイン

予備的評価であることから1群事前・事後テ

ストデザインによる方法を採用した。

### 2. 参加者

調査への参加者は本プログラムに参加した生後2～3か月の乳児を初めてもつ母親である。参加者はプログラム実施団体の作成したチラシやホームページ、市報を見て参加してきている。本プログラムはA市とB市において2013年6月～12月（7クール）と2014年1月～12月（12クール）の計19か月の期間に実施した。そのうち2013年はA市で7クール（62名）、B市で5クール（58名）分のデータを回収した。2014年はA市で8クール（61名）、B市で11クール（130名）分のデータを回収した（311名）。311名から途中参加（5名）と子どもの月齢が4か月（12名）および欠損値（119名）を除くと<sup>4)</sup>175名分が残った（有効回答率56.3%）。資金不足により2013年はB市での実施は5クールのみとなった。質問紙の準備不足や配布の失念等により2014年はA市で2月、6月、9月、B市で10月のデータが収集できなかった。

### 3. 調査内容と分析方法

#### 1) 調査内容

##### (1) 参加者の属性

年齢、子どもの月齢、子どもの性別、パートナーの年齢、世帯構成、就労形態、教育歴である。なお、教育歴については調査の途中から収集し、世帯構成はアンケートの回答時間が長くなり、プログラムの実行に支障があるとのファシリテーターからの要望から途中より削除した。

##### (2) 参加者の特徴とプログラム目標の測定

#### ① 育児不安スクリーニング尺度

「育児不安の解消と自信の獲得」は操作的に育児不安因子と自信のなさ因子を測定できる育児不安スクリーニング尺度15項目（「全くそう思わない」から「よくそう思う」までの4件法）を使用した（吉田他，1999）。1週間の自分自身の育児について回答してもらった。

生後1・2か月の母親を対象としたものであり、標準偏差と15項目の合計得点によって不安の程度を5段階に分けて、不安の高い相談支援の対象者をスクリーニングすることができる

ことから、参加者の育児不安の特徴を把握しやすいと考えた。得点が高いほど育児不安と自信のなさが高いと解釈する。

## ② 虐待不安

虐待不安は「子どもを虐待しているのではないかと思うことがある」の1項目（「全くそう思わない」から「よくそう思う」までの4件法）を使用した。1週間の自分自身の育児について回答してもらった。得点が高いほど虐待不安が高いと解釈する。

## ③ 子どもへの肯定的な気持ち

子どもへの肯定的な気持ちとして「子どもをかわいいと思う」の1項目（「全くそう思わない」から「よくそう思う」までの4件法）と「子どもの笑顔やしぐさに救われることがある」の1項目（「全くそう思わない」から「よくそう思う」までの4件法）を使用した。1週間の自分自身の育児について回答してもらった。得点が高いほど肯定的な気持ちが高いと解釈する。

## ④ 夫婦関係満足度

夫婦関係満足度は1週間の夫婦関係について現在の満足度を1項目で「非常に不満」から「非常に満足」までの10点満点で評価するものを使用した。得点が高いほど夫婦関係満足度が高いと解釈する。

## ⑤ 夫婦間の会話時間

夫婦間の会話時間は1項目（「1日30分以下」, 「1日30分から1時間くらい」, 「1日1時間から2時間くらい」, 「1日2時間以上」の4件法）を使用した。得点が高いほど会話時間が長いと解釈する。

## ⑥ 子育てする地域に対する肯定的な気持ち

最近1か月で子育てを行っている地域に対する気持ちを測定するものとして子育てコミュニティ感尺度9項目（「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの5件法）を使用した（宇野, 2013）。教示は「あなたの現在、住んでいる地域はどのような状態だと感じていますか。ここ1か月で感じられることについてお答えください」である。項目内容は、Table 3に記載している。得点が高いほど子育てを行っている地域に対する肯定的な気持ちが高いと解釈する。

## ⑦ 自主サークル化

「自主サークル化」とはプログラム終了後に参加者同士で会いたいという要望を実現するために世話役を決めたり集まる場所を決めたりする過程である。その過程の中で参加者によってサークルの名前がつけられる。名前がつくことで実体を持つようになる。さらに参加者同士で連絡先の交換が行われ、再会の約束が交わされる。このことから、プログラム終了後に「コアラ」などの名前がつけられたサークルの数を指標とした。

## (3) 尺度の信頼性と妥当性

育児不安スクリーニング尺度は生後1・2か月の乳児をもつ母親を対象とした尺度として信頼性と妥当性が検討されているものである。子育てコミュニティ感尺度は信頼性と妥当性の検討は行われておらず、母集団への効果の推定には向かない<sup>5)</sup>。しかし、本プログラムの参加者の地域に対する感情の変化を捉えうるものに近い項目で構成されていると判断できたことと、結果の一般化よりもプログラム参加者の特徴の把握やアウトカム変数の妥当性を検討することを目的としていることから測定具として採用した。

## 2) 分析方法

プログラム実施前後で配布・回収したアンケートを単純集計した。育児不安スクリーニング尺度は因子分析、子育てコミュニティ感尺度は主成分分析を行った。また、プログラム実施前後の回答結果は対応のある $t$ 検定を行った。効果量（Cohenの $d$ ）は、大久保・岡田（2012, p.55）を参照した。

## 4. プログラムの実施内容

### 1) プログラムの構造

本プログラムは定員が12組の保育付きプログラムで、週に1回実施し、連続4回を1クールとしている。各回をセッションと呼び、1セッションは約2時間である。初めて生後2～3か月の子育てをする母親が対象であり、対象者は子どもが同じ誕生月の人としている。したがって、年間12クール実施されることになる。各回は、赤ちゃんと参加者の「同室」場面から始まり、赤ちゃんと輪になって座り自己紹介や前

回の振り返りなどを行う。次に、赤ちゃんが別室で保育される「別室」場面となり参加者たちはグループワークを行う。グループワークに入る前にアイスブレイクを必ず行う。グループワークの内容は、第1回では「みんなに聞いてみたいこと、心配なこと、気になること」(付箋に書き出し分類後、参加者の意見を共有する)、第2回では「赤ちゃんがいて良かったことと悪かったこと」(育児に関する気持ちを共有)と「パートナーの良い点2つ困った点3つ」(配偶者に対する思いを共有する)、第3回では「自分と子どもの現在・過去・未来」(時間の流れを意識化することで今を相対化する)を行う。母子別室で行われるグループワークは1時間から1時間半である。最後に、赤ちゃんと参加者が再会する「同室」場面(保育スタッフからの一言や母子による手遊びや絵本の読み聞かせ)となる。第4回は自主サークル化に向けた練習である。保育がない。全て「同室」場面で行われ、お互いに子どもを預け合いながら子どもの名札作りを行い、後半の30分で自主サークル活動の注意点などをファシリテーターが伝え、交代で行う世話係を参加者の中から決める(特定非営利活動法人ウイズアイ, 2014)。

## 2) 各回のテーマ

第1回目は、「知る」がテーマとなっており、参加者同士が知り合うことや育児について知る。第2回目は、「深める」がテーマとなっており、参加者から提供された話題をきっかけにしながら参加者同士の関係性や自分自身の気持ちや考えなどを深める。第3回目は、「つながる」がテーマとなっており、参加者が未来に向けて人や地域とつながる。第4回目は、「続ける」がテーマとなっており、たまたまこのプログラムに参加することで結ばれた参加者同士の「縁」を途絶えさせず、参加者が主体的に活動を続けられる基盤を作る(特定非営利活動法人ウイズアイ, 2014)。

## 3) ファシリテーター

プログラムの進行はファシリテーターと呼ばれる支援者が行う。ファシリテーターは、グループワークを行えるスキルを持つ者で、参加者が居心地よく感じられるように配慮し、参加者が自分のことを語れるように促す。本調査実施

当時は、ベテランファシリテーター(経験年数10年以上)が2名、新人ファシリテーター(経験年数1年以上3年未満)が6名で実施している。なお、本プログラムの資格制度はなく、ベテランファシリテーターによる事前研修が行われている。

## 5. 倫理的配慮

目白大学人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会の承認を得てから実施した(14-011)。アンケートは任意の回答であり、公表時には秘匿化しプライバシーが守られ、回答しないことによる不利益は一切ないことを書面で説明して実施した。アンケートに回答することで調査への協力に同意したとみなした。

## 結果

### 1. 参加者の属性

#### 1) 年齢

年齢の最頻値は29歳で中央値は32歳であった。年齢の範囲は21歳から44歳で、20代が54名(30.9%)、30代が108名(61.7%)、40代が11名(6.3%)、不明が2名(1.1%)であった。平均年齢は、32.1歳であった( $SD=4.6$ )。配偶者は、最頻値は31歳で中央値は33歳であった。年齢の範囲は23歳から49歳で、20代が40名(22.9%)、30代が108名(61.7%)、40代が26名(14.9%)、不明が1名(0.6%)であった。平均年齢は、33.7歳であった( $SD=5.4$ )。

#### 2) 子どもの月齢と性別

子どもの月齢は2か月児が100名(57.1%)、3か月児が68名(38.9%)、不明が7名(4.0%)であった。子どもの性別は男児が85名(48.6%)、女児が77名(44.0%)、不明が13名(7.4%)であった。

#### 3) 世帯構成

世帯構成は、配偶者と子どもからなる核家族が168名(96.0%)とほとんどを占め、配偶者と子どもと祖父母からなる大家族は6名(3.4%)で、その他が1名(0.6%)であった。

#### 4) 就労形態

就労形態は、常勤雇用が15名(8.6%)、非常勤雇用(パート・アルバイト含む)が6名(3.4%)、自営業(家業)が13名(7.4%)、自

Table 1  
参加者の属性

項目	n	%
年齢		
20代	54	30.9
30代	108	61.7
40代	11	6.3
不明	2	1.1
配偶者		
20代	40	22.9
30代	108	61.7
40代	26	14.9
不明	1	0.6
子どもの月齢		
2か月児	100	57.1
3か月児	68	38.9
不明	7	4.0
子どもの性別		
男児	85	48.6
女児	77	44.0
不明	13	7.4
世帯構成		
配偶者と子どもからなる核家族	168	96.0
配偶者と子どもと祖父母からなる大家族	6	3.4
その他	1	0.6
就労形態		
常勤雇用	15	8.6
非常勤雇用（パート・アルバイト含む）	6	3.4
自営業（家業）	13	7.4
自営業（家業）の手伝い	17	9.7
無職	4	2.3
専業主婦	32	18.3
育児休業中	12	6.9
不明	76	43.4
教育歴		
中卒	1	0.6
高卒	17	9.7
短大（専門学校）卒	43	24.6
大学卒	74	42.3
大学院卒	4	2.3
不明	36	20.6
居住年数		
1年未満	18	10.3
1年以上 2年未満	10	5.7
2年以上 3年未満	13	7.4
3年以上 5年未満	18	10.3
5年以上 10年未満	2	1.1
10年以上	3	1.7
不明	111	63.4

営業（家業）の手伝いが17名（9.7%）、無職が4名（2.3%）、専業主婦が32名（18.3%）、その他として育児休業中と回答したのが12名（6.9%）、不明が76名（43.4%）であった。育児休業中と回答した人は被雇用者と推定される。常勤、非常勤、自営業、育児休業中と形態は異なるが仕事をしている有職者が63名（36%）、無職を含めた専業主婦が36名（20.6%）であった。

## 5) 教育歴

教育歴は中卒が1名（0.6%）、高卒が17名（9.7%）、短大（専門学校）卒が43名（24.6%）、大学卒が74名（42.3%）、大学院卒が4名（2.3%）、不明が36名（20.6%）であった。不明を除いて再計算すると、短大（専門学校）卒と大学卒と大学院卒を合わせると121名（86.4%）と教育歴が長い人が多かった。なお、教育歴に「不明」が多いのは、データの収集を途中から行ったからである。

## 6) 居住年数

居住年数は1年未満が18名（10.3%）、1年以上2年未満が10名（5.7%）、2年以上3年未満が13名（7.4%）、3年以上5年未満が18名（10.3%）、5年以上10年未満が2名（1.1%）、10年以上が3名（1.7%）、不明が111名（63.4%）であった。また、不明を除いて再計算すると3年未満が41名（64.1%）となり、5年未満が59名（92.2%）であった。なお、居住年数に「不明」が多いのは、データの収集を途中から中止したからである。

## 2. 尺度構成

### 1) 育児不安スクリーニング尺度

育児不安スクリーニング尺度の合計得点は正規分布していた。各項目の床効果と天井効果を確認したところ（ $M \pm 1SD$ ）、床効果のあった項目は、吉田他（1999）で育児不安因子を構成する5項目であった<sup>6)</sup>。これらの項目を順に除外しながら、重みなし最小二乗法（プロマック

Table 2  
育児不安スクリーニング尺度の因子分析結果

項目内容	f1	f2	共通性
<b>第1因子 自信のなさ</b>			
⑭自分の子どもの育て方はこれでいいのだろうかと思うことがある。	.88	-.09	.68
⑮自分は子どものことをわかっていないのではないかと思うことがある。	.80	.01	.65
⑪自分はずまく子どもを育てていないのではないかと思うことがある。	.80	.02	.67
⑫子どもを育てる自信がないと思うことがある。	.73	.05	.58
⑬子どもを育てていてどうしたらいいかわからなくなることがある。	.67	.15	.60
<b>第2因子 育児不安</b>			
③疲れやストレスがたまっていてイライラする。	-.02	.77	.57
⑩育児や家事など何もしたくない気持ちになることがある。	.06	.62	.44
①子育てをやるようになってから社会的に孤立していると思うことがある。	-.08	.60	.31
⑥子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある。	.13	.54	.40
⑧体の疲れがとれずいつも疲れている感じがする。	.07	.52	.33
	因子間相関		
	f1	f2	
	f1	—	.68
	f2	—	—
	クロンバックの $\alpha$		
	.90	.69	

ス回転)による因子分析を行った。固有値の推移は第1因子から順に4.95, 1.21, .76, とあり, 2因子構造と考えられた。寄与率は, 第1因子が49.46%, 第2因子が12.10%で累積寄与率は61.56%であった。因子負荷量が.50以上の項目を採用した。吉田他(1999)と同じ因子を構成する項目が確認できたことから因子名は先行研究にならって第1因子は「自信のなさ」, 第2因子は「育児不安」とした。各項目の因子負荷量, 共通性, 因子間相関係数, クロンバックの $\alpha$ はTable 2に記載している通りである。

## 2) 子育てコミュニティ感尺度

子育てコミュニティ感尺度9項目の合計得点は正規分布し, 各項目の床効果と天井効果はなかった( $M \pm 1SD$ )。次に, 子育てコミュニティ感尺度9項目を総合するために主成分分析を行った。その結果, 固有値の推移は第1主成分から順に5.52, .93, とあった。第1主成分の寄与率が61.36%で第2主成分の寄与率は10.29%であり, 第1主成分が抽出された。各項目の主成分負荷量, クロンバックの $\alpha$ はTable 3に記載している通りである。

Table 3  
子育てコミュニティ感尺度の主成分分析結果

項目内容	第1成分
2. 私の住む地域は, 子育てをしている親に対してやさしい。	.83
9. 私の住む地域は, 子どもを気軽に, 安心して任せられる感じがある。	.82
7. 私の住む地域は, 子育てする上で誰かに頼っても大丈夫そうな感じがある。	.81
4. 私の住む地域は, 子育てに対して積極的な役割を取ろうという感じがある。	.79
1. 私の住む地域は, 子どもに対するまなざしがあたたかいようだ。	.79
5. 私の住む地域は, 自分の子育てだけでなく, 他の人の子育ての役に立とうという感じがある。	.78
8. 私の住む地域は, 子育てに関して, 「お互い様だよ」 というような感じがある。	.77
3. 私の住む地域は, どんな子どもであっても受け入れている感じがある。	.73
6. 私の住む地域には, 子どもたちのことで, 自分たちが中心となって企画をしたり, 参加できるような感じがある。	.71
	寄与率 61.36%
	クロンバックの $\alpha$ .92

## 3. アウトカム変数でとらえた参加者の特徴

### 1) 5段階の育児不安でとらえた調査対象者の特徴

育児不安スクリーニング尺度(10項目)の合計得点を吉田他(1999)と同様の手続きで5段階に分けた(Table 4)。不安が軽い第1段階( $M-1SD$ 未満, 14点以下)の人は, 実施前は24名で実施後は29名であった。不安がやや軽い第2段階( $M-1SD$ 以上 $M-1/2SD$ 未満, 15点~17点)の人は, 実施前27名で実施後は31名であった。不安が普通の第3段階( $M-1/2SD$ 以

上 $M+1/2SD$ 未満, 18点~23点)の人は, 実施前は72名で実施後は68名であった。不安がやや高い第4段階( $M+1/2SD$ 以上 $M+1SD$ 未満, 24点~25点)の人は, 実施前は21名で実施後は17名であった。不安が高い第5段階( $M+1SD$ 以上, 26点以上)の人は, 実施前は31名で実施後は30名であった。

吉田他(1999)と比較できるように, 育児不安スクリーニング尺度(15項目)の合計得点を吉田他(1999)と同様の手続きで5段階に分けた(Table 5)。不安が軽い第1段階( $M-1SD$

Table 4  
育児不安5段階の分布（10項目）

	第1段階 不安軽い 範囲 -1SD未満 得点範囲 14以下	第2段階 不安やや軽い 範囲 -1SD以上~-1/2SD未満 得点範囲 15~17	第3段階 不安普通 範囲 -1/2SD以上~+1/2SD未満 得点範囲 18~23	第4段階 不安やや高い 範囲 +1/2SD以上~+1SD未満 得点範囲 24~25	第5段階 不安高い 範囲 +1SD以上 得点範囲 26以上
実施前	人数 24 割合 (%) 13.7	人数 27 割合 (%) 15.4	人数 72 割合 (%) 41.1	人数 21 割合 (%) 12.0	人数 31 割合 (%) 17.7
実施後	人数 29 割合 (%) 16.6	人数 31 割合 (%) 17.7	人数 68 割合 (%) 38.9	人数 17 割合 (%) 9.7	人数 30 割合 (%) 17.1

注) 得点域は本研究データ（10項目版）から算出。

Table 5  
育児不安5段階の分布（15項目）

	第1段階 不安軽い 範囲 -1SD未満 得点範囲 22以下	第2段階 不安やや軽い 範囲 -1SD以上~-1/2SD未満 得点範囲 23~26	第3段階 不安普通 範囲 -1/2SD以上~+1/2SD未満 得点範囲 27~35	第4段階 不安やや高い 範囲 +1/2SD以上~+1SD未満 得点範囲 36~39	第5段階 不安高い 範囲 +1SD以上 得点範囲 40以上
実施前	人数 43 割合 (%) 24.6	人数 36 割合 (%) 20.6	人数 67 割合 (%) 38.3	人数 16 割合 (%) 9.1	人数 13 割合 (%) 7.4
実施後	人数 53 割合 (%) 30.3	人数 27 割合 (%) 15.4	人数 71 割合 (%) 40.6	人数 12 割合 (%) 6.9	人数 12 割合 (%) 6.9

注) 得点域は吉田他（1999）と同じ。15項目で算出。

未満、22点以下)の人は、実施前は43名で実施後は53名であった。不安がやや軽い第2段階 ( $M-1SD$ 以上 $M-1/2SD$ 未満、23点~26点)の人は、実施前36名で実施後は37名であった。不安が普通の第3段階 ( $M-1/2SD$ 以上 $M+1/2SD$ 未満、27点~35点)の人は、実施前は67名で実施後は71名であった。不安がやや高い第4段階 ( $M+1/2SD$ 以上 $M+1SD$ 未満、36点~39点)の人は、実施前は16名で実施後は12名であった。不安が高い第5段階 ( $M+1SD$ 以上、40点以上)の人は、実施前は13名で実施後は12名であった。

## 2) 虐待不安の傾向

「子どもを虐待しているのではないかと思うことがある」(1項目)の回答分布は、実施前に「全くそう思わない」と回答した者は162名(92.6%)、「いくらかそう思う」と回答した者は10名(5.7%)、「ときどきそう思う」と回答した者は3名(1.7%)、「よくそう思う」と回答した者は0名であった。実施後に「全くそう思わない」と回答した者は161名(92.0%)、「いくらかそう思う」と回答した者は12名(6.9%)、「ときどきそう思う」と回答した者は2名(1.1%)、「よくそう思う」と回答した者

は0名であった。

## 3) 育児不安スクリーニング尺度5段階における虐待不安の分布

育児不安スクリーニング尺度(10項目)の合計得点(実施前)を吉田他(1999)と同様の手続きで5段階に分け、各段階における「子どもを虐待しているのではないかと思うことがある」(虐待不安)の回答を算出した(Figure 1)。その結果、第1段階(56名)において、「全くそう思わない」と回答した者は54名(96.4%)、「いくらかそう思う」と回答した者は2名(3.6%)、「ときどきそう思う」と回答した者は0名、「よくそう思う」と回答した者は0名であった。第2段階(29名)において、「全くそう思わない」と回答した者は28名(96.6%)、「いくらかそう思う」と回答した者は1名(3.5%)、「ときどきそう思う」と回答した者は0名、「よくそう思う」と回答した者は0名であった。第3段階(74名)において、「全くそう思わない」と回答した者は68名(91.9%)、「いくらかそう思う」と回答した者は5名(6.8%)、「ときどきそう思う」と回答した者は1名(1.4%)、「よくそう思う」と回答した者は0名であった。第4段階(12名)において、「全くそう思わない」

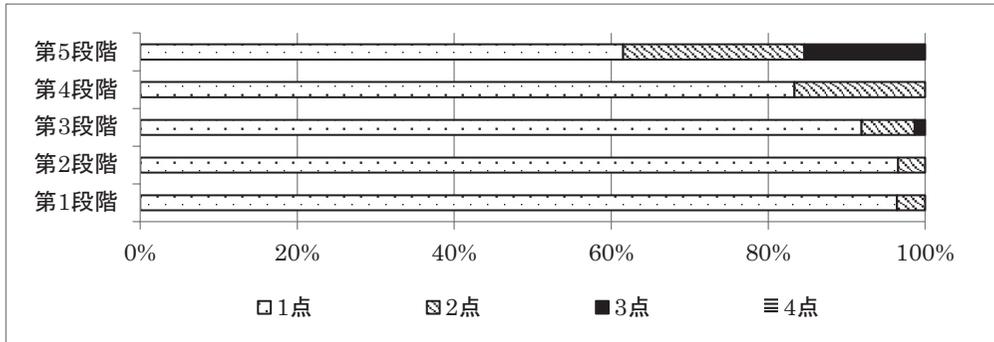


Figure 1 育児不安5段階における虐待不安の回答割合

と回答した者は10名(83.3%),「いづらかそう思う」と回答した者は2名(16.7%),「ときどきそう思う」と回答した者は0名,「よくそう思う」と回答した者は0名であった。第5段階(13名)において,「全くそう思わない」と回答した者は8名(61.5%),「いづらかそう思う」と回答した者は3名(23.1%),「ときどきそう思う」と回答した者は2名(15.4%),「よくそう思う」と回答した者は0名であった。

4) かわいさ・救われる気持ちの傾向

「子どもをかわいいと思う」(1項目)の回答分布は,実施前に「全くそう思わない」と回答した者は5名(2.9%),「いづらかそう思う」と回答した者は0名,「ときどきそう思う」と回答した者は7名(4.0%),「よくそう思う」と回答した者は163名(93.1%)であった。実施後に「全くそう思わない」と回答した者は4名(2.3%),「いづらかそう思う」と回答した者は2名(1.1%),「ときどきそう思う」と回答した者は4名(2.3%),「よくそう思う」と回答した者は165名(94.3%)であった。

「子どもの笑顔やしぐさに救われることがある」(1項目)の回答分布は,実施前に「全くそう思わない」と回答した者は3名(1.7%),「いづらかそう思う」と回答した者は1名(0.6%),「ときどきそう思う」と回答した者は8名(4.6%),「よくそう思う」と回答した者は163名(93.1%)であった。実施後に「全くそう思わない」と回答した者は2名(1.1%),「いづらかそう思う」と回答した者は1名(0.6%),「ときどきそう思う」と回答した者は4名(2.3%),「よくそう思う」と回答した者は168名

(96.0%)であった。

5) 夫婦関係満足度と夫婦間の会話時間の傾向

夫婦関係満足度(1項目)の回答分布は,「非常に不満」を1点で「非常に満足」を10点とした場合,実施前に「1点」と回答した者は1名(0.6%),「2点」と回答した者は1名(0.6%),「3点」と回答した者は6名(3.4%),「4点」と回答した者は6名(3.4%),「5点」と回答した者は14名(8.0%),「6点」と回答した者は12名(6.9%),「7点」と回答した者は26名(14.9%),「8点」と回答した者は50名(28.6%),「9点」と回答した者は29名(16.6%),「10点」と回答した者は30名(17.1%)であった。実施後に「1点」と回答した者は1名(0.6%),「2点」と回答した者は1名(0.6%),「3点」と回答した者は6名(3.4%),「4点」と回答した者は5名(2.9%),「5点」と回答した者は10名(8.0%),「6点」と回答した者は21名(12.0%),「7点」と回答した者は20名(11.4%),「8点」と回答した者は49名(28.0%),「9点」と回答した者は32名(18.3%),「10点」と回答した者は30名(17.1%)であった。操作的に1点から5点に回答した者を夫婦関係満足度低群,6点から10点に回答した者を夫婦関係満足度高群とした。夫婦関係満足度低群では,実施前が28名(16.0%)で実施後が23名(13.1%)であった。夫婦関係満足度高群では,実施前が147名(84.0%)で実施後が152名(86.9%)であった。

夫婦間の会話時間(1項目)の回答分布は,実施前に「1日30分以下」と回答した者は17名(9.7%),「1日30分から1時間くらい」と回

答した者は44名(25.1%)、「1日1時間から2時間くらい」と回答した者は51名(29.1%)、「1日2時間以上」と回答した者は63名(36.0%)であった。実施後に「1日30分以下」と回答した者は15名(8.6%)、「1日30分から1時間くらい」と回答した者は53名(30.3%)、「1日1時間から2時間くらい」と回答した者は47名(26.9%)、「1日2時間以上」と回答した者は60名(34.3%)であった。

#### 4. アウトカム変数の妥当性

##### 1) 育児不安と自信のなさ、および虐待不安の実施前後の変化

プログラム実施前と実施後の育児不安スクリーニング尺度10項目の合計点の平均値の差を明らかにするために $t$ 検定を行った(Table 6)。その結果、実施前では20.82点( $SD=5.62$ , 得点範囲10点~37点)で、実施後では20.07点( $SD=5.66$ , 得点範囲10点~36点)であり、実施前の得点の方が有意に高かった( $t(174)=2.54$ ,  $p<.05$ ,  $d=.13$ (効果量小), 得点の差の信頼区間は.17~1.34)。因子ごとに実施前と実施後の合計点の平均値を $t$ 検定によって比較したところ、育児不安因子は実施前では10.06点( $SD=2.83$ , 得点範囲5点~17点)で、実施後では10.01点( $SD=3.05$ , 得点範囲5点~19点)で有意差はなかった( $t(174)=.268$ ,  $d=.02$ (効果量なし), 得点の差の信頼区間は-.29~.38)。自信のなさ因子は実施前では10.77点( $SD=3.53$ , 得点範囲5点~20点)で、実施後では10.06点( $SD=3.27$ , 得点範囲5点~19点)で、実施後の得点の方が有意に低かった( $t(174)=3.70$ ,  $p<.01$ ,  $d=.21$ (効果量小), 得点の差の信頼区間は.33~1.09)。

プログラム実施前と実施後の「子どもを虐待しているのではないかと思うことがある」(虐待不安, 1項目)の平均値の差を明らかにするために $t$ 検定を行った(Table 6)。その結果、実施前では1.09点( $SD=.34$ , 得点範囲1点~4点)で、実施後では1.09点( $SD=.32$ , 得点範囲1点~4点)で有意差はなかった( $t(174)=1.00$ ,  $d=.00$ (効果量なし))。

仮説1の「育児不安スクリーニング尺度得点は実施前よりも実施後の方が低い」は支持され

た。ただし、因子ごとの結果では「育児不安因子得点は実施前よりも実施後の方が低い」は支持されず、「自信のなさ因子得点は実施前よりも実施後の方が低い」は支持された。また、「虐待不安得点は実施前よりも実施後の方が低い」は支持されなかった。

##### 2) 夫婦関係満足と夫婦間の会話時間の実施前後の変化

夫婦関係満足度(1項目)の平均値の差を明らかにするために $t$ 検定を行った(Table 6)。その結果、実施前では7.60点( $SD=1.94$ , 得点範囲1点~10点)で、実施後では7.64点( $SD=1.92$ , 得点範囲1点~10点)で有意差はなかった( $t(174)=.72$ ,  $d=.02$ (効果量なし))。よって、仮説2の「夫婦関係満足度得点は実施前よりも実施後の方が高い」は支持されなかった。

夫婦間の会話時間(1項目)の平均値の差を明らかにするために $t$ 検定を行った(Table 6)。その結果、実施前では2.91点( $SD=1.00$ , 得点範囲1点~4点)で、実施後では2.87点( $SD=.99$ , 得点範囲1点~4点)で有意差はなかった( $t(174)=.35$ ,  $d=.05$ (効果量なし))。よって、仮説2の「夫婦間の会話時間得点は実施前よりも実施後の方が高い」は支持されなかった。

##### 3) 子育てコミュニティ感の変化の実施前後の変化

プログラム実施前と実施後の子育てコミュニティ感尺度9項目の合計点の平均値の差を明らかにするために $t$ 検定を行った(Table 6)。その結果、実施前では28.47点( $SD=5.73$ , 得点範囲16点~45点)で、実施後では31.05点( $SD=6.17$ , 得点範囲18点~45点)で、実施後において有意に得点が高かった( $t(174)=-6.55$ ,  $p<.01$ ,  $d=.44$ (効果量中), 得点の差の信頼区間は-3.36~-1.81)。よって、仮説3の「子育てコミュニティ感得点は実施前よりも実施後の方が高い」は支持された。

##### 4) 自主サークルの数

プログラム終了後に名前がつけられたサークルの数は31であった。よって、仮説4の「プログラム終了時点において自主サークルが作られる」は支持された。

Table 6  
実施前と実施後の各変数の平均値

	実施前後	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i> 値 ( <i>df</i> )	<i>d</i>
育児不安スクリーニング尺度	実施前	175	20.82	5.62	2.54 * (174)	.13
	実施後	175	20.07	5.66		
育児不安因子	実施前	175	10.06	2.83	.268 (174)	.02
	実施後	175	10.01	3.05		
自信のなさ因子	実施前	175	10.77	3.53	3.70 ** (174)	.21
	実施後	175	10.06	3.27		
虐待不安	実施前	175	1.09	.34	1.00 (174)	.00
	実施後	175	1.09	.32		
夫婦関係満足	実施前	175	7.60	1.94	.72 (174)	.02
	実施後	175	7.64	1.92		
夫婦間の会話時間	実施前	175	2.91	1.00	.35 (174)	.05
	実施後	175	2.87	.99		
子育てコミュニティ感	実施前	175	28.47	5.73	-6.55 ** (174)	.44
	実施後	175	31.05	6.17		

注) \* $p < .05$  \*\* =  $p < .01$ 

## 考察

### 1. 参加者の特徴

#### 1) 年齢, 子どもの月齢と性別, 世帯構成, 就労形態, 教育歴, 居住年数

参加者の年齢は30代が多く, 子どもの月齢は2か月児が多かった。子どもの性別の違いについては大きな差はなかった。これらから, 一般的な子育て家庭が参加していると考えられる。参加者の年齢の幅が広いことで多様なメンバーの参加による豊かな交流が生まれるメリットがあると考えられる。また, 同月齢の子どもを持つ者同士が出会うことで育児の状況が似ている部分もあり, 参加者同士で育児に関する話題に共感しやすいと考えられる。一方, デメリットは世代差によって共有できる話題が少ないことや, 各家庭の経済状況, 生活水準, 教育水準が異なることでお互いの違いが明確になりすぎて他者を受け入れにくくなることであると考えられる。また, 子どもを比較することにより子どもの発達への不安を助長する可能性もある。しかし, 「○○さんはそのように考えていらっしゃるようですね」というようなファシリテーションによってお互いの違いを尊重する意識を高めたり, 子どもの発達には個人差があり, 「みんな違っていい」というような多様性に価値を置く姿勢をファシリテーターが示すこともできるので, 解決困難なデメリットではないと

考えられる。

世帯構成は, 配偶者と子どもからなる核家族が168名(96.0%)とほとんどを占めていた。また, 居住年数を5年未満として計算すると92.2%と高い割合となっている。居住年数が少ないのは結婚を機会に転居してきたのではないかと考えられる。居住年数が少ないということは地域とのつながりもほとんどない中で子育てを始めていると考えられる。そして, 子育てをきっかけに地域とのつながりを求めて本プログラムに参加していると考えられる。就労形態の特徴はほとんど見出されない。仕事の有無にかかわらず本プログラムに参加していることがうかがえる。

教育歴は比較的長い人が参加している。本プログラムはポピュレーション・アプローチの方法として考えられているが, 参加者のうち高卒者が少ないことから必ずしもすべての階層の子育て家庭が参加しているわけではないと考えられる。

#### 2) アウトカム変数でとらえた参加者の特徴

参加者の育児不安スクリーニング尺度得点を操作し5つの段階に分類した(Table 4, 5, Figure 1)。各段階の分類基準得点を見ていくと, 吉田他(1999)に比べ育児不安が低い段階に分類される人たちが多い。また, 子どもに対する虐待不安が低い人たちが多く参加してい

る。さらに、子どもへの肯定的な気持ちを抱き、夫婦関係満足度が高い人たちが多く参加していると考えられる。夫婦間の会話時間については回答傾向から特徴はつかめない。ただし、育児不安が高い人や虐待不安を抱く人、また、子どもへの肯定的な気持ちを抱きにくい人、夫婦関係に不満を抱いている人が参加していた。そして、育児不安が高い人の中に、虐待不安を抱く人が含まれていた。すなわち、夫婦関係や子どもとの関係で困難を抱えている人たちが、あまり困難を抱えていない人たちに混ざって参加している可能性が考えられる。確かに困難を抱えている人の参加は少数である。しかし、支援においてこのような気になる特徴を持つ人たちが参加していることは見逃せない。今後、公認心理師や保健師等の専門職による支援が必要な参加者がどのくらいいて、その人たちは本プログラムの支援だけで十分なのかどうかについても検討する必要がある。特に育児不安スクリーニング尺度による分類のうち第5段階の人で虐待不安を抱き、子どもへの肯定的な気持ちを抱きにくく、夫婦関係に不満を抱いている参加者の特徴を事例研究やプログラム参加者やファシリテーターへのインタビュー調査によって明らかにする必要がある。

本プログラムは、これらの指標の得点が高い参加者を主たるターゲットとしているのではないことが明らかになった。つまり、1次の虐待予防で対象となる層が主たるターゲットになっていると考えられる。

## 2. 尺度構成

### 1) 育児不安スクリーニング尺度

吉田他(1999)と全く同じ因子構造を再現できたわけではなく、床効果のあった項目を削除することになった。また、吉田他(1999)と比べて本研究参加者の回答得点が低い傾向にあった(Table 4・5)。吉田他(1999)の発表以後、地域子育て支援拠点や一時保育事業など子育て支援サービスが充実してきたことが得点を低めている可能性がある。一方で初めての子育てで自分の弱みを見せられない心理やネガティブな心理の否認が働いている可能性もあり測定誤差として得点が低くなったのかもしれない。育児

不安因子を構成する項目が少なくなったが、吉田他(1999)と同様な因子を再現できたことから本尺度は本プログラムの参加者であっても測定が可能であると考えられる。ただし、育児不安因子のクロンバックの $\alpha$ がやや低いので今後も測定に関しては慎重な解釈が必要であろう。

### 2) 子育てコミュニティ感尺度

主成分分析の結果、第1主成分にまとめることができた。信頼性も確認できた。今後、妥当性の検討が必要である。

## 3. アウトカム変数の妥当性

### 1) 育児不安の解消と自信の獲得

育児不安スクリーニング尺度10項目の分析結果によると本プログラムに参加することで育児不安が軽減する可能性が示唆された。ただし、効果量は小さかった。因子ごとにみえていくと、育児不安因子得点よりも自信のなさ因子得点に有意差があった。育児不安因子は、疲れやストレスによるイライラ、意欲の減退、孤立などで構成されている。孤立感の本プログラムに参加し仲間を得ることによって軽減する可能性が残されているが、疲れやストレスによるイライラ、意欲の減退といった心身に関わる内容は本プログラムの参加だけでは軽減されない可能性がある。育児不安因子得点は日常的な情緒的サポートや育児や家事の支援を受けることや一時保育などによるリフレッシュなどによって軽減されると考えられる。一方、自信のなさ因子得点が有意に減っていることから、本プログラムを通して自信を獲得していくことがうかがえた。グループワークの中に「みんなに聞いてみたいこと、心配なこと、気になること」や「赤ちゃんがいて良かったこと悪かったこと」があり、これらのワークでは自他の育児を知ったり、育児に対するさまざまな気持ちに気づいたり、育児の見通しを持てるような工夫が行われている。参加者の自由記述によると、余裕やゆとりを持ち、自己を客観視することができ、自分だけでなく他の人も同じような悩みを持っていることに気づく体験をしている(宇野, 2019)。また、親子で行う手遊びや絵本の読み聞かせは具体的な育児方法の獲得である。このような活動によって参加者は自信を獲得してい

ると考えられる。ただし、子育て経験の積み重ねによる自信の獲得といった外生要因による影響もあると考えられる。

虐待不安をアウトカム変数として設定してよいのかどうかについては、さらなる検討が必要である。その理由として、虐待不安が低い人が多く参加していること、虐待不安を測定する尺度が1項目であり、虐待不安を正確に測定できていない可能性があること、グループワークの内容が虐待不安の軽減に関連していない可能性があることが考えられる。ただし、生後2・3か月では、まだしつけは始まらないと考えられるにもかかわらず、虐待不安を抱えている人が参加している。虐待行為の確認を視野に入れながら、虐待不安の訴えは支援を求める切実な声と認識し、公認心理師や保健師等の専門職につなげていく支援を行う必要があるだろう。

以上から、吉田他(1999)によって概念化されている「自信のなさの低減」をアウトカム変数として設定することの妥当性はあるのではないかと考えられる。ただし、育児不安因子(疲れやストレスによるイライラ、意欲の減退)で測定される心身の変化をアウトカム変数とするのであれば、リラクゼーションの導入など心身の回復に関連する活動が検討される必要があるのではないかと考えられる。また、虐待不安をアウトカム変数とするのであれば、虐待不安に焦点化したグループワークに再構成した方がよいのかどうかや虐待不安の測定具の開発が検討される必要があると考えられる。さらに、参加者のニーズに「子育てに不安がある」というのがある(宇野, 2019)。参加者のニーズに対応することも重要であり、また、虐待不安を抱えている人が参加しているという事実もあることから「育児不安の解消」や「虐待不安の解消」をアウトカム変数として設定してよいのかどうかについて再度プログラムの利害関係者と検討し、コンセンサスを得ていく必要性が示唆された(Rossi et al., 2004大島・平岡・森・元永監訳2005, p.155)。

## 2) パートナーとの関係を結び直す

「夫婦関係満足度」や「夫婦間の会話時間」といった夫婦関係は、本プログラムに参加することによって高めたり、増やしたりする可能性は

ほとんどないと考えられる。ただし、宇野(2019)によると参加者の自由記述には、パートナーへの感謝の気持ちや夫に関心を向け会話を増やそうとすることが書かれていた。本プログラムのグループワークに「パートナーの良い点2つ困った点3つ」がある。この中で参加者はパートナーに対する気持ちを話しあい、共感しあうと考えられている。「パートナーとの関係を結び直す」については、概念の妥当性の検討や測定具の開発が必要である。

## 3) 子育てしやすい社会作り

子育てコミュニティ感尺度の分析結果によると子育てを行っている地域に対する気持ちに変化が生じていることがうかがえた。参加者の多くは、地域に暮らし始めて間もない核家族が多かった。「同じくらいの月齢の子を持ち近くに住む母親と出会い・交流したい」というニーズがあると考えられている(宇野, 2019)。子育てする地域に対する肯定的な気持ちがさらに高まった理由は、本プログラムがこのような交流や出会いの場を提供し、参加者のニーズを満たしているからだと考えられる。具体的には、参加者がグループワークの中で体験を語り、共感される体験や肯定的な交流を体験しながら、地域から受け入れられ大事にされているという実感を得たからだと考えられる。「子育てしやすい社会作り」とは、地域の中に気軽に声をかけ合う人が増えることや地域の子はみんなかわいく思えること、身近な子育ての事柄だけでなく、子育てを通して、社会環境を改善したり改革したりすることへの意識を向けることである(宇野, 2015)。「子育てしやすい社会作り」の記述と子育てコミュニティ感尺度の項目内容とは完全に一致しているわけではない。しかし、本プログラムのアウトカム変数として妥当性がないとは言えないのではないかと考えられる。

## 4) 自主サークル化

31クールすべてで自主サークルの名前が付けられた。本プログラムに参加することで子育て仲間を得ることができる。このことは地域における子育ての機能的なコミュニティを作るきっかけになっていることを意味する。このような機能的コミュニティの生成は自治体の責務であり、生成に対して積極的な財政的支援が期待

される。例えば、本プログラムのようなアウトカムが設定されているポピュレーション・アプローチによる子育て支援プログラムを、子育て支援団体や助産師会などに委託あるいは補助金を与えて実施することが考えられる。そうすることで、市区町村は、自らの専門的資源をハイリスクの人たちに集中することができると考えられる。

「自主サークル化」の記述の妥当性については、立ち上げまでの支援であるということが明確であり、自主サークルの立ち上げ数を数えることができ観察可能であることから妥当性があるのではないかと考えられる。また、参加者はプログラムに参加することによって友達や相談相手ができ「関係を継続していきたい」というニーズを持つ(宇野, 2019)。関係継続のニーズに対応して「自主サークル化」がアウトカム変数とされていることは妥当であると考えられる。

## 結論

本研究の1つ目の目的は、ポピュレーション・アプローチと呼べる集団を対象としているのかを明らかにすることであった。その結果、参加者の特徴は、年齢の幅は広く、配偶者と子どもからなる核家族で地域に暮らし始めて間もない人たちであり、子どもに対する不安は低く、子どもへの肯定的な気持ちを抱き、夫婦関係満足度は高い人たちであった。ただし、参加者の中には、育児不安が高く虐待不安を抱く人が含まれていた。また、子どもへの肯定的な気持ちを抱けない人や夫婦関係に不満を抱く人が含まれていた。これらのことから本プログラムはポピュレーション・アプローチ(1次的予防)で対象となる参加者が参加していると考えられる。

2つ目の目的は、アウトカム変数の設定に関する有用な知見を得ることであった。その結果、本プログラムのアウトカム変数に妥当性があることが一部で確認された。しかし、「育児不安や虐待不安の解消」と「パートナーとの関係を結び直す」に関する記述の妥当性についてプログラムの利害関係者と検討し、アウトカム変数の内容についてコンセンサスを得ていく必要

性が示唆された。今後、プログラムの実践を継続しながら、アウトカム変数を適切に測定できる尺度の開発を行い、アウトカム変数の妥当性を高める研究が必要である。

## 付記

2013年度独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業から本プログラム実施に関する助成を受けた。また、本研究は2014年度科学研究費助成事業若手研究(B)0歳児の養育者支援プログラムの実践と開発評価(課題番号26870548, 研究代表者:宇野耕司)によって本プログラムの実施とその評価に関する助成を受けた。

本論文の一部を日本子ども家庭福祉学会第14回全国大会(2014年6月)で口頭発表し、日本子育て学会第10回大会(2018年9月)でポスター発表したものを再構成したものである。

## 文献

- Butchart, A., Harvey, A. P., Mian, M., Fürniss, T. & Kahane, T. (2006). *Preventing child maltreatment: a guide to taking action and generating evidence*. Geneva: World Health Organization(ブッチャー A. ハーベイ A. P. ミアン M. フュルニス T. ケーン T. 小林美智子(監修)藤原武男・水木理恵(監訳)坂戸美和子・富田拓・市川佳世子(訳)(2011). エビデンスに基づく子ども虐待の発生予防と防止介入—その実践とさらなるエビデンスの創出に向けて— 明石書店)
- 原田 正文(2006). 子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防 名古屋大学出版会
- 原田 正文(2007). 親支援プログラム“Nobody's Perfect”とは?日本の親にぴったり!虐待予防にもなるプログラム 保健師ジャーナル, 63(9), 774-777.
- 広岡 智子(2003). 虐待問題をかかえる親へのグループアプローチ—予防的グループから治療的グループへの展開— へるす出版生活教育, 47(1), 14-21.
- 北澤 潤(2018). 健やかな親子とは—健やか親子21で取り組む虐待防止, 小児保健研究, 77(2), 112-116.

- 牧野 カツコ (1982). 乳幼児を持つ母親の生活と〈育児不安〉 家庭教育研究所, 3, 34-56.
- 三上 直子(1995). 母子関係の悪化に対する予防的アプローチ (続報)「幼い子を持つ母親のための講座」におけるグループ・カウンセリング心理臨床学研究, 13(3), 333-338.
- 大原 美知子(2002). 育児不安と虐待—子育ては楽しいですか? 国際基督教大学学報 I—A 教育研究, 44, 287-294.
- 大久保 街亜・岡田 謙介(2012). 伝えるための心理統計—効果量・信頼区間・検定力 勁草書房
- Rose, G. (1992). *The strategy of preventive medicine*. Oxford university press. (ローズG, 曾田研二・田中平三(監訳)水嶋春朔・中山健夫・土田賢一・伊藤和江(訳)(1998). 予防医学のストラテジー:生活習慣病対策と健康増進 医学書院)
- Rossi, P. H., Lipsey, M. W., & Freeman, H. E. (2004). *Evaluation: A Systematic Approach*. 7th ed. New York: Sage Publications. (ロッシP. H. リプセイM. W. フリーマンH. E. 大島巖・平岡公一・森俊夫・元永拓郎(監訳)(2005). プログラム評価の理論と方法—システマティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド— 日本評論社)
- 庄司 順一(2008). 子ども虐待はなぜ起こるのか 高橋重弘(編). 子ども虐待(新版)(pp.93-105) 有斐閣
- 特定非営利活動法人ウイズアイ (2014). 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラム実施マニュアル (初版) 特定非営利活動法人ウイズアイ
- 宇野 耕司(2013). 夫婦を対象とした予防的心理教育プログラムの開発評価—子育てユニット形成促進過程の分析— 日本社会事業大学大学院博士学位論文
- 宇野 耕司(2015). 初めて0歳児を持つ母親を対象とした効果的な「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムモデルの開発—実践家・利用者参画型によるプログラム開発の取り組みから 目白大学心理学研究, No.11, 15-27.
- 宇野 耕司(2016). 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの評価可能性アセスメント 目白大学心理学研究, No.12, 15-28.
- 宇野 耕司(2019). 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの対象者のニーズとプログラム目標の再検討 目白大学心理学研究, No.15, 1-15.
- 渡邊 茉奈美(2011). 「育児不安」の再検討—子ども虐待予防への示唆 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 191-202.
- 山崎 さやか・篠原 亮次・秋山 有佳・市川 香織・尾島 俊之・玉腰 浩司…山縣 然太郎 (2018). 乳幼児を持つ母親の育児不安と日常の育児相談相手との関連—健やか親子21最終評価の全国調査より 日本公衆衛生雑誌, 65(7), 334-346.
- 吉田 弘道(2012). 育児不安研究の現状と課題 専修人間科学論集心理学篇, 2, 1-8.
- 吉田 弘道・山中 龍宏・巷野 悟郎・太田 百合子・中村 孝・山口 規容子・牛島廣治 (1999). 育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究—1・2か月児の母親用試作モデルの検討— 小児保健研究, 58(6), 697-704.

### 【脚注】

- 1) ポピュレーション・ストラテジーとは、Rose (1992曾田・田中監訳1998, pp.26-27) によると、「小さなリスクを背負った大多数の集団から発生する症例数は、大きなリスクを抱えた少数のハイリスク集団からの症例数よりも多い」という予防医学の根本的な原理原則に基づき、集団全体に小さなリスクが及ぶ場合に集団全体に便益をもたらすために集団全体に対して対策することである。この概念は保健医療分野だけでなく、子ども家庭福祉や子育て支援においても考え方とその戦略が取り入れられている。本研究ではポピュレーション・アプローチと表記する。
- 2) 山崎他(2018)の再カテゴリー化の根拠は、牧野(1982)に対する解釈による。山崎他(2018)は、牧野(1982)の「子の現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」という育児不安の定義と「母親自身も不安の状態を明確に意識しているとは限らない」という牧野(1982)の見解を踏まえて、「何ともいえない」を選択した母親は、育児の中で漠然とした恐れや感情(育児不安)をかかえていると解釈した。ただし、「どちらともいえない」という回答の心理的背景を想像すると、必ずしも漠然とした恐れを含む情緒があるとは言えないケースもあると考えられる。山崎他(2018)の解釈の信憑性を確認するために「どちらともいえない」と回答した母親の心理状態を実証的に明らかにする必要があるだろう。
- 3) 再カテゴリー化の根拠は脚注2)と同じである。
- 4) 回答者の年齢など基本属性に関するデータが欠損しているがアウトカム変数の欠損がない場合は、分析対象に追加した。基本属性に関するデ

ータが欠損していてもアウトカム変数のデータが欠損している場合は、すべての分析対象から除外した。

- 5) 宇野(2013)では、地域感情尺度としているが、尺度名と項目内容との整合性を図るために、子育てコミュニティ感尺度に名称を変更した。
- 6) 床効果のあった5項目は、「②子育ては自分には合っていないので早く好きなことをしたいと思う。」、「④ゆったりとした気分で子どもと過ご

せない気がする。」、「⑤何か心が満たされず空虚である。」、「⑦一人で子どもを育てている感じがして気持ちが落ち込むことがある。」、「⑨だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思うことがある。」であった。

—2020年9.10.受稿, 2020年12.6.受理—

## A study of participant characteristics and the validity of outcome variables of the “First-time Mothers and Babies Program”

Koji Uno      Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2021 vol.17

### **[Abstract]**

This study assessed the validity of the outcome variables of the First-time Mothers and Babies Program (FMBP) and investigated the characteristics of participants.

A questionnaire survey was conducted before and after the FMBP (31 courses) with first-time mothers who have two-to-three-month-old infants (n = 175).

The study results revealed that participants in the FMBP were aged between their 20s and 40s; they were members of a nuclear family and relative newcomers in their community, with a few anxieties about child-rearing, high positive affection toward children, and high levels of marital satisfaction. However, some participants had extremely high anxiety about child-rearing and child-abuse, little positive affection toward children, and poor marital satisfaction. Furthermore, the outcome variables of the FMBP were only partially verified. However, anxieties related to child-rearing and child-abuse, and marital satisfaction and utterance length were not statistically significant.

Future research is required to develop scales that can measure the outcome variables appropriately and increase their validity.

**keywords** : Infant, child-rearing anxiety, child-abuse anxiety, population approach, program evaluation